

I あきる野市の自然

あきる野市は、都心から 40～50km 圏内に位置する、水と緑に囲まれた歴史のあるまちである。奥多摩山地から連なる山々、緩やかな丘陵地、大小の河川など変化に富んだ地形が、多様で豊かな環境をつくりだしている。市民、来訪者の声からも、あきる野市の魅力は「身近に豊かな自然があり、ふれあえること」であるといえる。

市の西部から北部の山地の地層は、3 億年前までさかのぼる。プレートの移動と地殻変動によって南側に付加体が形成され 2 億年前、1 億 5 千万年前と新しい地層に変わっていく。秋川に沿って走る五日市一川上構造線を境に南は、1 億年前の小仏層である。

これらの地層は北西部で海拔 1,000m の山地と深い谷を刻み、この古い基盤を源流とする秋川や平井川は、約 1,500 万年前に東から入り込んできた深い海に流れ込み、多くの海の生きものを育て、やがて海は去って大量の化石を残した。

300 万年ほど前には再び海進がみられ、多摩の山々から流されてきた土砂で、加住、草花の一連の丘陵が形成された。海が引くと、連なっていた加住、草花丘陵の礫層を秋川と平井川が削り、一段低い秋留台地を形成した。

この頃には、日本列島では各地で火山活動が活発になり、火山灰を一円に降らせ、赤土と呼ばれるロームが堆積して台地の窪地を埋めた。あきる野市の最上段の段丘面には、2～3 万年前以前の富士山の火山灰から成るローム層が見られる。

このように気の遠くなるような長い営みの中で、植物はそれぞれの土壌に適した場所で繁栄し、その環境を好む動物たちが棲みついたのである。

現在のあきる野市は、戦後の拡大造林により広葉樹林の針葉樹林化が進められたものの、素晴らしい自然環境が息づいている地域である。

市の西部にはスギ、ヒノキの人工林が広がっているが、ミズナラなどの山地の植物のほか、クリ、コナラなどの落葉広葉樹林も多数見られる。野生動物ではツキノワグマ、ニホンザル、ニホンジカなど哺乳類の奥多摩山地からの侵入が見られ、タカなどの猛禽類をはじめ、森林性の野鳥、ナガレタゴガエルやヒダサンショウウオなどの山地性の両生類が生息している。

丘陵部においては、コナラやエゴノキなどの雑木林をはじめ、多様な森が存在しており、里山を代表するタヌキやキツネなどの哺乳類、本市で発見されたトウキョウサンショウウオをはじめ、モリアオガエルなどの両生類の生息場所となっている。

市内を流れる秋川、平井川周辺では、ホタルが飛び交うとともに、多くの魚類や水生生物が生息し、河畔のオギやヨシの群落の中では、カヤネズミやイタチなどが生息している。

一方で、このような豊かな自然環境は、アライグマやハクビシン、オオキンケイギクやアレチウリなどの外来生物にとっても生息しやすく、在来動植物の脅威になっている。特に特定外来生物は、生息域の拡大など、生態系へ及ぼす影響が危惧され、その対策も求められている。

あきる野市は、東京都の中においても豊かな緑と清流に囲まれた、素晴らしい自然環境に恵まれた地域である。この自然を次世代に引き継ぐため、市民全体で保全に努めていく必要がある。

II 調査目的

あきる野市は、平成 16 年 4 月に「あきる野市環境基本条例」を施行し、平成 18 年 3 月に「あきる野市環境基本計画」を策定した。

あきる野市環境基本計画では、自然環境分野の重点施策として、あきる野市域における自然環境の状況を把握すること、市民の自然とふれあう体験の機会を提供し、貴重な自然を大切にすることを養うこと、自然環境の保全すべき地域の設定や保全などを検討することを掲げている。

あきる野市は、東京都の中でも有数の多様な自然が残っており、この自然環境の実態を把握することを施策実現の第一歩として、自然環境の調査を実施することとし、市民による調査組織「あきる野市自然環境調査部会」を設置し、地質、植物、動物の 3 班で調査を実施することとした。



「知って守ろうあきる野の自然」(平成 24 年 3 月発行)

あきる野市の自然を市民の皆さんに広く知ってもらうため、平成 21 年度～23 年度の調査結果をもとにリーフレットを作成し、配布しています。この報告書とあわせ是非ご覧ください。

★リーフレットは次の施設で入手できます。

あきる野市役所、五日市出張所、図書館、中央公民館、五日市郷土館、二宮考古館